

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：文学と芸術

部会長名：影山純夫

作成者名：影山純夫

概要（2000字）

「文学と芸術」部会は、人文学研究科 8 名、国際文化学研究科 6 名、人間発達環境学研究科 9 名から構成されている。前年度と比較すると文学研究科の部会員に 4 名程度の交代があった。ただし、新部会員が旧部会員の担当科目を引き継いでおり、授業の実施上大きな問題は生じなかった。

授業科目の内訳は

前期 伝統芸術－3 コマ 日本の文学－4 コマ 世界の文学－1 コマ
言語と文化－1 コマ 芸術と文化－3 コマ
後期 伝統芸術－3 コマ 日本の文学－3 コマ 世界の文学－1 コマ
言語と文化－3 コマ 芸術と文化－2 コマ

であり、前後期とも 1 2 コマで等しく、学生の要求に配慮した配置といえよう。しかしながら、日本の文学のコマ数が多く世界の文学のコマ数が少ない点については、今後何らかの対策を考えることが必要かもしれない。来年度部会員が 3 名退職するので、後任教員の専門分野も考慮しながら部会全体の授業科目の変更も検討する必要があるだろう。

人文学のうち文学や芸術にかんする学問は、多感な青年期の学生にとって感性を磨き人格を形成する上で非常に有益な学問である。音楽に聴き入り、文字文化やファッションに大いに興味を示す学生達に、そういった文化現象を客観的に捉えさせる視点を与え検討させることは、人生をより豊かにする上でも大切なことである。しかしながら、文学や芸術といった分野をこえて人文学といった学問に対する学生の興味は、どんどん低下しているように見える。部会員の中からも人文学への興味の低下が危機意識をもって語られるが、その打開の手段としては教養教育体制の抜本的な改革が必要なのかもしれない。抜本的な体制の改革は、多くの時間と労力が必要とされるのであって、部会員は現在の体制の中でできることとして、学生達に文学や芸術に対する興味とそれに対する批判的な視点を得させるために、様々な努力をしてはいる。文学や芸術は、作品と直接対峙することが望ましいが、平日の授業時間中に美術館や劇場などに足を運ばせることはほぼ不可能なので、視聴覚機器を使って疑似体験をさせるようにしている教員は、この部会内にも多い。しかしながら、その視聴覚教材の作成は各教員に任されており時間的な負担だけでなく、金銭的な負担も大きい。時間的な負担を軽減するために TA 制度があり活用している教員も多いが、予算の制約があり、なお教員がかなりの負担をせざるを得ないのが実情である。また例外的に美術館見学を行っている教員もいる。見学を実施すると、学生に交通費等の負担が生じるし、その間に事故が生じた場合の責任などの問題もある。一方、直接作品と対峙して得られる成果も大きい。この間の折り合いをどう付けるかといった検討も必要になるのかもしれない。それはともかく、近年かなりの大学が、美術館や博物館とメンバーシップ協定を結んでいるが、本学においても協定を結び、学生が金銭的な負担が無く自由に文化施設を見学できる制度を取り入れることも考えられてもよいのではないかと。

さて、シラバスには各教員の間でかなりの精粗があるが、おおよそ授業内容が学生にも十分理解できるように記述されている。また、授業内容についても、教員の研究成果を生かすように工夫されていると判断できる。教員の研究成果を反映しているかどうかを問う項目での自己評価は高い。自己評価が低い項目は、単位の実質化の項目と学習指導法の工夫の項目である。単位の実質化が意味するものは何なのかがはっきりしないことも評価が低い理由であろう。また人文学においては、到達度の設定が難しく、評価も

難しい。学習指導法の工夫については、情報機器の利用やT Aの利用が積極的になされてはいるが、200名という大人数の学生が履修する授業では、対話や討論を取り入れるのはかなり難しい。最大履修数を150名に、さらには100名に限定することで授業の進め方にも工夫ができるようになるので、授業数を増やすことが今後望まれる。成績評価・単位認定の項目での自己評価は高い。成績評価には学生も敏感に反応するので、シラバスで示した評価方法を守っている教員がほとんどである。しかし、授業中の学生の反応により評価の方法を変えることも認められるべきであろう。その場合学生に十分な説明をすることは必要ではあるが。教育の成果の項目での自己評価もかなり高い。根拠は学生評価などの客観的な資料によっている。

様式2（続き）

項目・観点ごとの記述

基準5 教育内容及び方法

5-1-②： 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

（観点到に係る状況）なっている。

根拠資料

シラバスおよび教員アンケート

5-1-③： 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

（観点到に係る状況）なっている。

根拠資料

シラバスおよび教員アンケート

5-1-⑤： 単位の実質化への配慮がなされているか。

（観点到に係る状況）どちらかといえばなっていない。教員は、実質化をどう評価するか、困惑しているというのが実情であろう。

根拠資料

教員アンケート

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。（例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。）

（観点に係る状況）本部会に関わる授業では、受講学生数が多く、講義以外の形態で授業を行うことは難しい。対話や討論も学生数から考えて全く不可能とはいえないにしてもかなり難しいといえよう。講義内容から情報機器は大いに利用されている。

根拠資料

シラバスおよび教員アンケート

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

（観点に係る状況）行っていない。本部会においては基礎学力を考慮することはない。基本的な知識の不足はあるが、高等学校のカリキュラムに関する問題でもあり、この問題をどう解決するかは部会を超えた課題である。

根拠資料

教員アンケート

5-3-②： 成績評価基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

（観点に係る状況）試験答案、レポート、リアクションカード、出席票を使い適切に実施している。

根拠資料

教員アンケートや学生アンケート

基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

（観点に係る状況）あがっている。

根拠資料

教員アンケートや学生アンケート

基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

（観点に係る状況）質問には誠実に答えており、十分理由のある要求には応えている。

根拠資料

シラバスおよび教員アンケート